

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第129号

多摩丘陵に残る
 義経の面影 - 4

義経と笹子姫 (その1)

麻生観光協会理事 麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

笹子姫を語るには、避けて通れぬ『鹿ヶ谷の陰謀』と『治承三年の政変』があります。

『平家にあらずんば、人にあらず』とは、清盛の室 時子の同母弟で平中納言時忠卿(異母妹が後白河上皇の妻で建春門院、通称滋子。子に憲仁(後の高倉天皇)がある)が、承安4年(1174)平家の絶頂期であったこの時期に残したフレーズとされる。これより3年後の安元3年(1177)6月に、驕る平家を倒そうと後白河法皇を中心とした公卿たちが、京都・東山の鹿ヶ谷にある俊寛の山荘(或いは信西の子 静賢法印の山荘とも)に集まり謀議が行われたとされる。その謀議には、時折後白河法皇の参加もありました。この密議も多田(源)行綱が清盛に密告したことで事前に露見、激怒した清盛はすぐさま計画の首謀者たちを、後白河法皇を除き捕えて処罰します。

院の第一の近臣と呼ばれた西光(藤原師光)は拷問の末、五条西朱雀で斬首され、首謀者の大納言 藤原成親は、当然死罪になるところを、成親の妹を妻にしている平重盛(清盛の嫡男)の必死の説得によって罪一頭を許され、備前の児島に流罪となるが、食事を与えられず殺害される。成親の嫡男・成経は、この事件当時 右近衛少将&丹波守で、清盛の弟 教盛の娘を妻にしていたため、教盛に救われ死罪を免れました。平康頼は『今様(当時の流行歌) 狂い』後白河の今様の弟子の一人。熊野御幸にも従っている。俊寛僧都は真言宗の僧で、村上源氏の出身です。藤原成経、平康頼、俊寛僧都の三人は薩摩の南方海上に浮かぶ鬼界ヶ島に流罪となります。

この陰謀で清盛は、後白河法皇自身の責任はあえて問わなかった。後白河法皇も表面は清盛との友好関係を修復することに努め、両者の対立は緩和されたかに見えた。しかし、この後、立て続けに事件が起こります。

1つ目、そんな緊張が続く治承2年(1178)高倉天皇に嫁いだ清盛の娘 徳子に待望の男子を出産、清盛は後白河に強く働きかけ、生後1ヶ月の言仁(ト北ト 後の安徳天皇)を立太子にさせます。この結果、言仁親王が天皇になれば武士の身分であった平家が、摂関政治で繁栄を極めた藤原氏を追い越すことにもなります。そして皇太子の後見人や身の回りの世話をする役人は平家一門で独占、後白河法王派を排除したため、院近臣たちは平氏に対し不満と警戒を強めることになった。また、この目出度い皇子の誕生を祝い、恩赦により鬼界ヶ島の流人は解放されるが、俊寛僧都だけは許されず、断食して自決の道を選びます。

2つ目、治承3年(1179)3月に平重盛が病に倒れ右大臣の職を辞任します。辞任が認められて4ヶ月後の7月、42歳の若さで病死します。10月には重盛が持っていた越前の守を、院近臣の藤原季能に与え重盛の知行国が没収されてしまいます。重盛逝去の結果、後白河と清盛の対立を抑えていた最後の砦が失われることになりました。

3つ目、関白 近衛基実の妻 盛子(清盛の娘)が治承3年6月、夫と同じ24歳の若さで亡くなります。詳細は省きますが、夫基実の死後 摂関家領の大半が盛子のもとなっていました。盛子逝去の後、なんと後白河法皇がゴリ押しして、この荘園を没収してしまう。

4つ目、治承3年10月の人事で、関白 松殿基房(近衛基実の弟)の8歳の子 師家が20歳の従兄弟の基通(父は基実)を差し置いて、権中納言になり、摂関家領を師家に取られてしまう。近衛基通の養母は平盛子なので、平家のメンツは丸潰れ。清盛がこの10月人事に激怒したことが、治承3年の政変の最も重大な契機となった。

つまりところ後白河と清盛の対立をギリギリの所で止めていた重盛が亡くなったことで一気に噴出、後白河法皇派によって先手を打たれ、平家は所領を没収されメンツもまる潰れになってしまいます。

これを知った清盛は激怒、兵庫の福原から数1000騎を引き連れて京都にやってきます。

そして翌日松殿基房、師家の二人をクビにし、近衛基通を関白に任命、同時に没収された摂関家の所領も取り戻します。清盛の強硬手段に、さすがの後白河もビビリまくり『今後は政治に一切口出しは致しません』と申し入れますが、清盛の怒りは収まらず、太政大臣、藤原師長を始めとする反平家派の公暁・殿上人・受領・検非違使など31名が大量に解官されます。また全国でも大幅な人事異動も行われ、平氏の知行国はクーデター前の17ヶ国から32ヶ国へと大幅アップ。当時の日本は全部で66ヶ国あったので、半分は平家のものになりました。

これらの命令には平家側の高倉天皇の公式な命令書が発行されています。そして後白河は世の中が鎮まるまで安全な場所に避難していただきますという名目で『鳥羽離宮』へと移され、幽閉されてしまうのです。事実上院政は停止されてしまいました。(続く)



万福寺に残っていた笹子稲荷

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第99話

岡上の山伏

小島 一也 (遺稿)

麻生区の岡上に通称「山伏谷戸」と呼ぶところがあります。小名は自正寺、天神谷戸と言いますが、その奥部が山伏谷戸で、元禄時代(1688~1704)、京都醍醐寺三宝院の修験者四坊(家)が居住していたことからその名が付けられました。京都三宝院とは、平安時代後期の永久3年(1115)、京都伏見に建立された真言宗醍醐派総本山醍醐寺の子院のことで、山伏とは、日本古来の山岳宗教と仏教の密教、中国の道教を結び付けた宗教の実践者で、靈験を得るため山中で修験・加持・祈禱を業としますが、この修験道は、真言宗系(三宝院)と天台宗系(聖護院)の2流に分かれていたそうです。

この岡上山伏(修験者)四坊とは、圓覚院、持宝院、玉宝院、泉宝院の四坊で、坊とは宿坊を意味し、どの坊にも不動尊像が安置された院(祠)があり、護摩が焚かれていました。「不動の金縛り」とは、修験者の秘法の一つで、伝承によるとこの山伏谷戸には「斗藪とそう」と呼ぶ精神修行に用いた細道が今もかすかに残っているそうです。前述のようにこの山伏の業は真言密教を教義に加持・祈禱・呪術・儀礼を持って庶衆を救うとするもので、毎年奈良吉野郡にある修験者の本山鳳閣寺(開創寛平7年、895、真言宗)で四坊の歴代当主は修験を続け、特に享保(1732)、天明(1738)、天保(1833)の大飢饉、安政(1855)の大地震には、加持祈禱に村々を回ったようです。岡上を中心に奈良・恩田・長津田・三輪・麻生・大蔵・金井・町田などに多くの信徒を持ったと言われ、毎年、奈良の真言宗の靈山大峰山(鳳閣寺修行地)に入り、年に一度、前記京都醍醐寺三宝院の靈札を出しますが、この日(1月28日)、この谷戸は大変な賑わいを見せたと伝えられています。

幸いなことに、この岡上の山伏を知る資料のいくつかは、高松家・梶家に保存され、市民ミュージアムに寄贈されています。その一つが京都三宝院から出された修験者の階位を定めた「補任状」という任命書で、圓覚院(高松家)には17通が残されており、一番古いのは延享2年(1745)、新しいのは天保7年(1836)で、その後も続きますから、岡上の山伏は150年の歴史を持つものと思われま。享和元年(1801)の補任状には「武州岡上 醍醐院三宝御門院主 当山修験派圓覚院」の文字があるそうですから、岡上の四院は京都伏見の醍醐寺(秀吉の醍醐の桜、国宝五重塔で有名)を本山としていたことが判ります。

また、この岡上山伏の存在を示す資料として、慶応4年(1868)、岡上村名主から幕府への差出書の中には、寺宝院、玉

宝院、泉谷院、圓覚院の記載があり、「右之者 百姓地住居地方は村役人支配請人別地頭村へ書上 触頭鳳覚寺へも人別書出申候由 銘々不動堂一ヶ所宛所持仕候」と申告しています。この鳳覚寺とは前記奈良鳳覚寺の分院が東京青山にあったそうで、そこの支配を受けていたのでしょう。



高松三春家不動堂の祭壇

政13年(1830)山伏時代の墓石には「泉宝院権大僧都等空法師印」と山伏の階位を示すいかめしい法名のものが、帰農後の明治26年(1893)に亡くなられた梶家の当主龍泉氏の墓石には「龍岳法泉信士」と印されています。なお、この龍泉氏は奈良県吉野の金峰山を本拠とする「神道御嶽教」の訓尊(役員)だったそうですが、一般人と変わらぬ戒名となっています。四家(坊)は、東光院(真言宗)の檀家となり、持宝院の不動尊は、東光院に納められ、260余年の里山伏の歴史が閉じられます。なお明治44年(1911)神奈川県知事より「世にも珍しい三孝子」の表彰を受けたのは、この持宝院(高松家)の人であったことを付記しておきます。

(参考文献)「郷土岡上(岡上郷土史会)」 「柿生郷土史(柿生小学校)」 「歩け歩こう麻生の里(麻生老人クラブ)」 「柿生文化(柿生郷土史料館)」 「企画展 呪いと祈り図録(川崎市民ミュージアム)」



高松三春家に残された補任状

明治5年5月、維新の太政官令でこの修験道は廃止の布告を受けます。従って岡上四坊の圓覚院(高松三春家)・持宝院(高松道雄家)・玉宝院(梶孝男家)・泉宝院(梶孝男家)は、帰農、改姓して一般農家となりますが、圓覚院(高松三春家)には、不動堂が残されており(二度お参りしたことがある)、九尺二間程の小さなお堂で、正面には、お厨子に納められた不動明王像が安置され、法螺貝・法具や木版木易書と思える書籍が納められていましたが、今は不動尊像・法具は京都三宝院へ返納され、書籍類は川崎市民ミュージアムに寄贈されているそうです。

帰農後の四家(坊)は、一般岡上村民としての生活を送りますが、泉宝院(梶孝男家)の墓碑を見ると文

シリーズ
教育の歩み 第1部

学校の誕生と成長(17)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆イギリスの中等教育◆

パブリックスクールと文法学校との違いは、次の2点にありました。第1に全寮制の事実が示すように、パブリックスクールはローカルな存在ではなく、全国各地から子弟を集める有名校だったことです。そのためここでは、寄宿制度が重要な意味を持っていたのです。第2に寄宿舎の寮費は決して安いものではなく、かなりの高額であったため、中流階級に属する家族には、負担が重すぎて子弟を入学させるのは、とても難しかったのです。そのためパブリックスクールは、貴族やジェントリーの子弟のための教育機関という性格を持っていたのです。歴史の古い、ウィンチェスター、イートン、ハーロー、ラグビー、ウエストミンスターなどが、代表的なパブリックスクールとして知られています。

ところで、パブリックスクールや文法学校の教育内容はどうだったのでしょうか。高等教育機関である大学に、入学するための準備教育機関というのが、こうした学校の位置づけでした。したがって中等教育機関の教育内容が充実しているなら、大学の知的水準も自ずから高いものとなります。

ところが、中等教育機関の教育内容の実態は、とても充実しているとは言い難い状態にありました。文法学校に至っては衰退傾向さえ示していたのです。篤志家の寄付に頼る基金は枯渇しかけており、全国から寮生を集めることができるパブリックスクールを除けば、経営状態は押しなべて不振だったのです。そのうえ経営状態に不安のないパブリックスクールの教育も、決して褒められたものではありませんでした。卒業生を受け入れる大学側の困惑ぶりに耳を傾けると、その実態が浮かび上がります。「入学生の半数以上は、ラテン語とギリシア語をしっかり教わっているはずなのに、ただ古代の作家の文章や詩句を暗誦できるとどまっている。正しく古典の文章が書ける学生は、ほんの一握りしかない」と。

そこでパブリックスクールの側は、勉学の成果に替わるものとして、徳育の向上、人格の陶冶を目標に上げました。寮の生活は、その全てが寮生の自治に委ねられ、上級生が全てを仕切るシステムになっていました。その結果、最上級生は新入生を、召使であるかの如くこき使う伝統まで作り出し、識者の悪評を買う始末だったのです。なかでも、1790年から1810年にかけてのラグビー校では、寮生の自治はコントロールを失って暴走し、軍隊が鎮圧に出動する騒ぎにまで発展してしまっただけです。当然、産業革命の進展の中で、こうした古き教育システム、古き風習に批判が強まります。

19世紀の10年代に入ると、産業革命も後半期に入り、急速に広がりを見せ始めたブルジョワジーや中産階級など、イギリス社会における中流とされる人たちの層が、次第に分厚くなってゆきます。この人たちが、文法学校やパブリックスクールの在り方を強く批判するようになったのです。論点は多岐にわたりましたが、根本的な問題は、パブリックスクールが有閑階級である貴族やジェントリーのみを対象にしているかのように、ギリシア・ラテンの古典的教養にのみ特化している点にありました。職業を持ち、禁欲的精神と勤労に価値を見出す中産階級は、数学や自然科学、そして社会認識(当時は経済学の揺籃期でした)や現代語など、実践に役立つ学問や知識を渴望してやまなかったのです。伝統を固執する中等教育機関は、中産階級のこうした要請にまったく対応できなかったのです。

当然ながら、勢いを増す中産階級の声を、無視し続けることは不可能でした。

19世紀の中葉にかけて、中等教育に関する何らかの改革は、避けて通れない情勢となったのです。中産階級は、自分たちの必要を満たすような新しい学校の創設を望み、前述したような数学、自然科学、社会科学、現代語などの教育を中心とする学校を、次々に設立していったのです。設立母体は、子弟に新種の教育を施すことを望む中産階級の人たちで、自分たちが学校の株式を買う形で資金を集めて経営を維持し、子息卒業時に学校を仲立ちとして、その株式を新入生の親たちに譲渡したり、学校に寄付したりして、学校経営の安定を図ったのです。私立学校の学債に近い性格を持っていたと考えるとわかりやすいですね。この方式では、毎年の入学者を確保できさえすれば、経営は安定します。益々層の厚くなる中産階級の期待を集めた学校ですから、入学希望者は常に定員を上回り、入学試験は難関となってゆきました。こうして経営の安定した新設の学校は、高い教育水準を実現し、維持することができたのです。



1860年頃のラグビー校
手前がラグビー発祥の地とされるグラウンド



トーマス・アーノルド

こうなると、パブリックスクールの側も、指を食わえているわけにはいかなくなります。ラグビー校の校長だったトーマス・アーノルドが中心となって、古典語学習に加えて数学、地理・歴史、外国語、自然科学などをカリキュラムに加え、古典語の比重を全体の7割程度に抑える改革を実行したのです。まだ古典教養が全体の7割を占めていたのですが、パブリックスクールが重い腰を上げて、自ら変化に向けて動き出したことは、評価できました。(続く)

第9回史跡見学バスの旅レポート
武蔵の国の古代を訪ねて

やや旧聞になってしまいましたが、昨年11月20日(火)に行われましたバスツアーの様子を写真で報告させていただきます。併せてホームページもご覧いただければ幸いです。

さきたま古墳公園散策



丸墓山古墳の頂上から関東平野を臨む



丸墓山古墳から稲荷山古墳へ



吉見百穴をガイドさんの説明で



軍需工場の内部をうかがう



松山城跡 未整備の山道を歩く



柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

2月 2・16・23日(毎土曜日) **3月** 3・10・17・24日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (2月9日は休館です)

明治維新150周年記念 協賛企画 第3弾(最終回)

第79回
カルチャーセミナー

明治政府の功罪

徳川幕府に変わって権力を掌握した明治政府は、日本を植民地にしようとする欧米列強の攻勢に耐えて、いかに独立を守り抜くかという困難な課題を見事に果たしました。この功績は大変大きなものですが、他方で、1894～95年(明治27～28年)の日清戦争を皮切りに、10年ごとに対外侵略戦争を繰り返すという、軍事大国化し、ついにはアジア・太平洋戦争という無謀な戦争に突入して、自滅するという負の面も持っていました。なぜそうなったのかについて、わかりやすく解説します。

講師：小林 基男氏 (柿生郷土史料館専門委員)

日時：3月17日(日) 午後1時30分～3時30分

会場：柿生郷土史料館特別展示室

第16回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 その4
～ 平成前期 ～

昭和30年創刊の地域のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿を紹介してまいりましたが、今回は昭和の終わりから、平成前期を中心に、人口急増期の地元の変貌の過程を紹介できればと考えています。

期間 2月16日(土)～6月15日(土) 会場 柿生郷土史料館特別展示室